

# 「気付き」を生かしたテーマ活動の取り組み

## —— テーマ活動と学校英語教育を繋ぐ試み ——

和田稔

(明海大学名誉教授)

### 論文の概要

英語学習における「気付き」(notice)をテーマ活動でどのように取り入れるか、の研究テーマで実践研究した結果を報告する。平成 29(2017)年に小学校の学習指導要領が告示されたが、日本の学校英語教育の歴史で初めて小学校に英語学習が導入された。小学校における英語教育の目標の核は「日本語と外国語(英語)の違いに気付くこと」である。ラボのテーマ活動はテキストとCDを教材としているが、それらは英語と日本語の2言語の併用をベースにしている。つまり、「日本語と外国語(英語)の違いに気付く」ことを実践するのに最適なものである。このような観点から「英語と日本語の違い」に気付き、「気付き」をどのように生かすか、を実践的に研究した。その成果(の1部)の報告である。

研究協力者:平内恵子テューター(千葉支部)

### キーワード

気付き, テーマ活動, 改訂小学校学習指導要領外国語(英語)の目標, 気付きと自立した学習者, 気付きと学習者と指導者の共同作業(conference)

### はじめに

本論考はラボのテーマ活動に「日本語と英語との違いに気付くこと」(平成29(2017)年告示小学校学習指導要領の目標)を取り入れることでラボ会員(以下, ラボっ子)達の日本語と英語への認識にどのような変化をもたらすかを調べる試みの報告である。長年にわたってラボのテーマ活動は英語の習得に独自の理念と実践で取り組んできた。その積み重ねは貴重な成果を収めてきた。一方, 平成29年告示の文部科学省の小学校学習指導要領で学校英語教育が大きく変わったことを受け, 今までよりテーマ活動は学校英語教育との接点への認識が求められていると思われる。本稿はこのような認識を踏まえ, ラボのテーマ活動と平成29年告示の小学校学習指導要領の外国語活動及び外国語科の目標の核である「日本語と英語との違いに気付くこと」との接点を探る試みの報告である。

## 1. 学習指導要領の「気付き」とテーマ活動

### 1.1 研究の出発点—小学校への外国語活動と外国語科の導入—

平成29(2017)年に告示された小学校学習指導要領に外国語活動(3学年と4学年)と教科としての外国語科(5学年と6学年)が導入され、小学校における本格的な外国語(英語)教育が始まった。日本の学校英語教育の歴史における画期的転換である。国は長い年月をかけて慎重に小学校における外国語(英語)教育の在り方を研究してきた。具体的に公立小学校への英語学習導入は平成8(1996)年に第15期中央教育審議会が発表した、「総合的な学習の時間」で「国際理解教育」の一環として外国語(英語)に触れる、という慎重な内容であった。そして、十数年を経て平成29年に正式に小学校に英語学習が導入された。このように長い年月を経て始まった小学校における英語学習は様々な角度から詳細な分析・検討が求められるのであるが、確かなことは英語学習が公式の教科として小学校で始まったことで、従来様々な英語教育機関が提供してきた独自の英語学習に影響を与えることであろう。

### 1.2 その接点—外国語活動と外国語科の目標とテーマ活動—

#### 1.2.1 外国語活動の(総括)目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの英語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

この(総括)目標で設定された「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力」は3つの(個別)目標を達成することにより育成されるとしている。そのうちの目標(1)は以下の通りである((2)及び(3)は省略)。

外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。

この(個別)目標の「日本語と外国語との音声の違い等に気付く」については、以下のように述べられている(『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編』(平成29年文部科学省))。

日本語の音声の特徴を意識させながら、外国語を用いたコミュニケーションを通して、日本語使

用だけでは気付くことが難しい日本語の音声の特徴や言葉の仕組みへの気付きを促すことにより、日本語について理解を深めることができる。(p.14)

### 1. 2. 2. 外国語科の(総括)目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと、の言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付ける。

この(総括)目標を達成するための3つの(個別)目標が設定されているのは、外国語活動の場合と同じである。そのうちの(1)は以下の通りである((2)及び(3)は省略)。

外国語の音声、文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くこと、に慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用出来る基礎的な技能を身に付けるようにする。

(『小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 外国語活動・外国語編』(平成29年 文部科学省 p.69)

### 1. 2. 3 テーマ活動

テーマ活動は日本語と英語の2言語から成るテキストおよび DISC (DISK) をもとに展開される。たとえば、「ケルトのおとぎ話」(Celtic Fairy Tale)の『Guleesh』の書き出しは次のようである。

Long ago, in County Mayo, there was a young man named Guleesh.

むかし、メイオ郡に、グリーシュという名前の若者がいた。

He lived alone in a little old farmhouse several miles from the town.

町から何マイルか離れた、古ぼけた小さな百姓家に、ひとりで住んでいた。

(「テーマ活動の友」Sounds in Kiddyland: Series 13. p.14)

この書き出しの部分には「外国語(英語)の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働き等に

ついて、日本語と外国語(英語)との違い」(外国語科の個別目標(1))を読み取ることができる。英語では「主語」(He)を明示するが、日本語では「主語を省略して文意が通じるときは削る」という表現上のきまりがある。テーマ活動はこのような違いに「気付く」絶好の機会を提供している。

#### 1. 2. 4 応用言語学の流れ—「気付き」と言語習得の研究—

小学校における外国語活動(第3学年および第4学年)と外国語科(第5学年及び第6学年)の目標の核をなすのは「気付き」であることは明らかになったが、「気付き」と応用言語学との関連について文部科学省は言及は避けている。しかし、言語習得の研究などに影響されていることは大いに考えられるのである。ここでは、「気付き」について言語習得の分野でどのように注目されているかみてみよう。

以下で、まず「気付き」(noticing)について、Encyclopedic Dictionary of Applied Linguistics(Johnson & Johnson 1998)の説明を見てみよう。続いて、「入力仮説」(input hypothesis)について、Longman Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics (Richards, Platt & Platt 1992)の簡潔な解説を見てみよう。

##### Noticing

Schmidt(1990) distinguishes various forms of ‘consciousness’ relevant to language learning. One of these is ‘noticing’, which occurs when something is attended to to the extent that it is ‘available for verbal report’. Schmidt and Frota (1986) explore the role of noticing for one learner, plotting what aspects of received input are noticed by the learner.

They then relate these noticed features to the learner’s speech production, and find that new features occurring in the learner’s speech are often those that have been noticed. This leads Schmidt and Frota to suggest that noticing plays an important role in language acquisition.

(p.230)

本研究を進めるに当たって、この説明からは次のことが参考になる。

- (1)「気付き」(noticing)は気付きの対象を「言葉で説明ができる」(verbal report) 度合に応じて起こる。
- (2)「気付き」は学習者が気付いた新しい対象を発話でしばしば使用する。

##### Input hypothesis

A hypothesis proposed by Krashen, which states that in second or foreign language

teaching, for language acquisition to occur, it is necessary for the learner to understand input language which contains linguistic items that are slightly beyond the learners' present linguistic competence. Learners understand such languages using cues in the situation. Eventually the ability to produce language is said to emerge naturally, and need not to be taught directly. (pp. 182 ~ 183)

この解説で、注目すべき点は「発話能力は自然に(naturally)習得される」という個所である。つまり、「自然に習得する」ことは、英語を学習して習得する日本の英語学習者は特殊な場合を除いて、成立が難しいということである。英語を習得するには「意識的な」手立てが必要であるということである。

本研究のねらいである「気付き」を生かした英語力の在り方の研究の立ち位置は、上記の言語習得についての2つの論点を踏まえる。

## 2. 研究の全体構成—その理論的観点—

### 2.1. 「気付き」の「連続体」(continuum)

自発的気付き —— 若干の自発的気付き —— 誘導的気付き —— 教え込む

これは、大津由紀雄氏が様々な機会に提示した図式である。日本の英語学習者が小学生、中学生、高校生と段階が上がるに従って変化する「気付き」の質を示す尺度であると

同時に「教師」(ラボの場合、チューター)と学習者(ラボの場合、ラボっ子)の関係を示す図式を示していると思われる。本研究でデータは小学生のラボっ子から高校生のラボっ子まで収集するねらいは、学習段階による「気付き」の質の変化を調査するためである。

### 2.2 ポートフォリオ(portfolio)

「ポートフォリオ」は「書類カバン」とか「書類入れ」などの意味である。日本では、「ポートフォリオ」は、主として、小学校で以前から「総合的学習の時間」などで使われているが、最近では CEFR(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment)の発表・普及に伴い、言語教育の分野で注目されるようになったものである。言語教育分野では「ポートフォリオ的アプローチによる評価」などと呼ばれるように、主として、英語能力の評価を目的とするものであるが、たとえば、次のような特徴は評価に限定せず広く言語教育で活用すべきであろう。

- (1) ポートフォリオは子どもたちの作品、自己評価などの記録であり、それらを積み重ねていくものである。
- (2) ポートフォリオは子どもと教師が協力して作り上げていくものである。

ラボのテーマ活動を実行するうえで、「おはなしにつき」などラボっ子は自分の活動をノートする経験は豊富である。その経験の蓄積は「気付き」についての記録に大いに役立つであろう。そして、「気付き」の記録の積み重ねを通して「気付きの質」の充実及びラボっ子達の自立した英語学習者(independent learner)の育成に繋がることを目指す。

たとえば、「気付きの質」の問題は Geof Hewitt(1995)が、「A Portfolio Primer」で提示している「作文の最終到達目標(goal-setting)と自己評価(self-assessment)」の理念が参考になる。「A Portfolio Primer」はアメリカのバーモント州で行われた「Vermont's Portfolio-Based, Statewide Writing Assessment Program」の報告であり、「作文(writing)の質の評価」に関わる実践の報告であるが、「気付きの質」を判断する視点として参考になるであろう。

Hewittによれば、「Portfolio」のねらいは学習者の Reflection(自省)であるがそのためには、教師(チューター)と学習者(ラボっ子)の「共同作業」(conference)が重要であるとして、次のように述べている。

In classroom discussions, the goal is to move beyond the “I like it” stage, past the “I like it because it’s interesting” stage, to stage three, “It’s interesting because the details are vivid,” and stage four, “The piece interests me because a lot of details is provided without the overuse of adjectives and adverbs.” The shift here is away from a vague, tepid, soft response toward focused observation, from judgment to description. A teacher’s conferences with individual students can model the goal of this shift. (p.174)

### 3. 研究計画と研究のねらい

研究は3つの段階に分けて行う。第1の段階は主としてデータ収集を目的とする。第2段階は収集したデータを分析・検討すると同時に、データに基づくチューターの役割を検討する。第3段階は、ラボっ子(英語学習者としてのラボっ子)が「気付き」をきっかけにしてどのような「自立した学習者」(independent learner)に成長したかを調べる。

本年度(2020年度)の研究は第1段階である。つまり、ラボっ子達がテーマ活動のなかで日本語と英語の違いに気付いたことを記録する段階である。

具体的には、

- (1) ラボっ子のうちから、具体的な研究協力者として、①小学生 ②中学生 ③高校生、それぞれから協力者を数名選ぶ。
- (2) 選ばれた研究協力者はテキストを読んだり、CD を聞いたりする過程で「気付いたこと」をノートする。そのうえで、「英語と日本語の違い」、「英語」自体、「日本語」自体について、どのようなことに興味を覚えたか、などをノートする。
- (3) ラボっ子達は話し合いでテーマ活動を作り上げてゆくが、その過程で「気付いたこと」がどのように生かされているかを観察する。

本来、本研究は学習指導要領が改訂され、小学校教育に外国語活動と外国語科が導入され、その達成目標の中心に「日本語と英語の違い」に「気付かせる」が設定されたことに注目して始まった。したがって、研究協力者は小学生に限定してもよいのであるが、本研究では「気付き」に対する学習段階別の特徴を調査することにしたのである。たとえば、小学生、中学生、高校生では「気付く」点が違うのか、同じなのか、小学生に自主的に「日本語と英語の違い」に「気付く」ことを期待するのは無理か、逆に英語に初めて接する小学生は日本語と日本語と英語の音声や文構造などの違いにより敏感か、中学生や高校生は「気付き」をどのように「言語化、内在化」するか、中学生と高校生では「言語化、内在化」にどのような違いがあるのか、ないのか、などを調査することが意義あることであろう

#### 4. 「気付き」の事例とこれからの研究課題

本年度はコロナ騒動の影響で、平内パーティも集合型での活動に制約があったが、このような困難な状況のなかでも平内パーティの協力で研究は着実に進んだ。平内パーティのラボっ子全員に対して研究への参加を呼び掛けると同時にそのなかでもデータ収集の協力者として、小学生、中学生、高校生を数人選んだ。

以下は、本年度、報告された事例の一部である。

##### <事例1 - 小学2年生の事例>

次の事例はラボっ子(小学校2年生)が英語の単語の発音をカタカナで表記したものである。当

該小学校2年生はこれを手掛かりに英単語の発音を独力で身に付けようとした。

soldier は「ソ(ル/ウ)ジャー， (2) strong man は「シュチュロングマン」，と表記した。  
(ル/ウ)は(ル)か(ウ)か，迷った結果の表記と思われる。

\*これからの研究課題

このような試みにはいろいろな意見があるであろう。たとえば，英語の音をカタカナ表記できるか，カタカナ表記を認めるのは邪道である，など様々な意見があるであろうが，本研究は小学校2年生の努力を「気付き」という観点から前向きに見て行こうとの立場にたつ。「o」を[ou]と発音する英語の二重母音は日本語と異なることの「気付き」を出発点にして，二重母音習得を目指す試みである。同様に，「シュチュ」はおそらく”str”という[子音+子音]の連続した組み合わせの発音を聞いた小学生がカタカナ表記をしたと思われる。[子音+子音]の組み合わせは日本語には無い。そのような英語の発音の特徴に戸惑いながら，この小学校2年生は表記したのではないか。戸惑いを出発点として「日本語と英語の音の違い」への「気付き」を大切にして，日本語の音声表記と英語の音声表記の違いを「足掛かり」(scaffolding)に英語の音声の習得に至る道筋をどのように付けるか，これからの研究課題である。

なお，同根の事例については，大津由紀雄氏に取り上げて別の角度から分析しているので紹介する(大津由紀雄・窪菌晴夫著『ことばの力を育む』(2008)p.159)。

「ストロング」という単語を聞いたことがある人も多いでしょう。「強い」とか「頑丈な」という意味の単語です。これをローマ字にすると，

(1) sutorongu

となります。

想像できると思いますが，この単語はもともと英語から取り入れたものです。もとの英単語は，

(2) strong

です。(1)には(2)にない母音が入っているのが分かりますね。

(3) sutorongu

これは，(2)のままでは日本語の個性に合わないのです。(3)のようにして，



「子音＋母音」という日本の個性にあわせた結果なのです。

#### <事例2 － 中学1年生の事例>

この事例は中学1年生のラボっ子の気付きの事例である。

th や ch や sh はローマ字読みするのとちゃんと英文で読むのでは発音が違う。

##### \* これからの研究課題

この事例と事例1を比較すると、英語の音を捉えるのにローマ字表記では不十分であることに気付いている点で興味深い。この気付きを足掛かりに th も ch も sh の音の習得に至る道筋をどのようにして付けるか、今後の研究課題である。

#### <事例3 － 文部科学省の小学校外国語教材の事例>

次は学習指導要領が改訂される前に観察された事例であるが、ラボっ子が直接気付いた事例ではなくラボの関係者の経験として提起された事例である。

小学校の外国語の授業のなかで、小学校6年生が質問した事例である。

次のやり取りは文部科学省の小学校外国語教材 We Can I に掲載されている「自己紹介」である。

Hi, my name is Kazu.

I like cats and dogs.

I like soccer and baseball.

この自己紹介を読んだ小学校6年生が「何故、”dogs and cats”なのに”soccer and baseball”なのですか？ “soccers and baseballs”は間違いですか？」と質問した。

##### \* これからの研究課題

この質問に対して「よく気付きましたね。でも、そのような細かいことにとらわれないで、カズは猫と犬とサッカーと野球が好きということが分かればよい」、が先生の答えであった。しかし、学習指導要領が改訂され、外国語科(小学校5学年と6学年)の目標が「外国語(英語)の音声や文字、

語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解する」が設定されたので、このような質問は前向きに取り上げる必要があるのではないかと思われる。英語では「可算名詞」と「不可算名詞」の区別があり、日本語にはそのような区別はない、英語では「単数」「複数」の区別があり、日本語にはない、と一般に言われている。このような「日本語と英語の違い」についての小学生の「気付き」は大切にする必要はあるのではないだろうか。

なお、上記の”cats and dogs”は、「可算名詞」としての「普通名詞」の複数形の総称的用法—名詞の示す人や物の全体を表す用法—なので、「数えられる名詞」と「数えられない名詞」用法の基本的違いの問題以外の意味を持つので、英語学習のこの段階での取り扱いには注意が必要である。また、名詞の複数に関わる問題は「日本語は非論理的な言語」だと言われるが、果たして本当か。単数と複数の区別がなくても支障がないのはなぜ？」といった「謎」にまで発展する。(飯田隆(2019)『日本語と論理 哲学者、その謎に挑む』NHK 出版新書)

このような複雑な情報を内包した名詞の「単数」と「複数」の違いを英語学習の「初心者」(novice)を対象に説明するとすると、極めて難しい課題に直面することを十分に意識しながら英語学習者の「気付き」を大切に受け止めることが必要だろう。

#### <事例4 — 高校1年生の事例>

2020年度の平内パーティが選んだテキストは「ケルト民話」の”Guleesh”である。“Guleesh”は英語の文章と日本語の訳文が「テーマ活動の友」(Sounds in Kiddyland:Series 13)に掲載されている。その英語の文章と日本語の訳文を比較して「気付いた」ことが次のように述べられている。

英語と日本語は違うな、と思ったこと。

英語は”No, indeed”であるのに、訳文は「そりゃ、そうさ」であること。(「テーマ活動の友」p.16)

“No”と否定で言っているけど、日本語にすると、「そりゃ、そうさ」と肯定しているのは英・日の違いだと思った。

#### \*これからの研究課題

この事例はラボのテーマ活動で英語と日本語を並列するテキストを使用しているという特徴を見事に反映している。と同時に、英語の否定表現というかなり高度な問題に気付い

た事例である。この事例を理解するために重要なことは“No, indeed”を文脈(やり取り)の流れのなかで読み取ることを理解させることであろう。

“Where are we now?” asked Guleesh in amazement.

“This doesn’t look like Ireland to me”

The fairies rocked about with laughter.

“No, indeed,” said one of them.

“We are now in the kingdom of France”

“In France!” exclaimed Guleesh.

“No, indeed”は”This doesn’t look like Ireland to me”を受けた英語の表現であることをラボっ子(高校1年生)が気付くことにより英語の否定表現を”Yes”, ”No”で受け止める規則を学ぶことができるのである。

## 5. 今後の研究の方向

本年度は、研究の第1段階である。次年度は、第2段階、第3段階に研究を進める。  
具体的には

### 5.1 データ収集の対象を拡大する。

来年度は、ラボっ子達から「気付き」のデータを積極的に収集する。  
特に、中学生と高校生からの事例を収集したい。(コロナ騒動が沈静化することを願う。)

### 5.2 個人の「気付き」に対するテューターと「仲間たち」(peers)の関わり方を理論的かつ実践的に研究する。

「気付き」は、一義的には、学習者の「主体性」(learner independence)を大切にする試みであるが、一方では、学習者(ラボっ子)と教師(テューター)とが協力して「主体性」を助長する試みでもある。この意味で、テューターの介入の在り方、ラボっ子同士での「話し合い」(conference)について研究する。

文献

Council of Europe (2001). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching and assessment*. Cambridge University Press.

Hewitt, G. (1995). *A portfolio primer teaching, collecting, and assessing student writing*. Heinemann.

Johnson, K. & Johnson, H. (Eds)(1998). *Encyclopedic dictionary of applied linguistics*. Blackwell Richards, J.C.

Platt J. & Platt, H. (1992). *Longman dictionary of language teaching & applied linguistics*. Longman.

飯田隆(2019)『日本語と論理: 哲学者, その謎に挑む』(NHK 出版)

文部科学省(2017)『小学校学習指導要領 外国語活動・外国語』 開隆堂

文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 外国語活動・外国語編』 開隆堂

大津由紀雄・窪菌晴夫(2008)『ことばの力を育む』 慶應義塾大学出版会